

香川大学での33年



教育学部教授
森 征洋

1974年4月教育学部に赴任し、地球物理学、とくに気象学に関する教育研究を担当してまいりました。理科系の場合、地方大学は研究条件が悪いと思われていましたが、附属図書館の参考係による文献複写業務が充実しており、また、計算機センターが整備されていたので、研究条件の悪さはそれほど感じませんでした。研究テーマとした風の気候学的特性に関する研究を進める上では恵まれていました。研究業績の多くは附属図書館と計算機センターに負っています。

赴任した当時の香川大学は教育学部、経済学部、農学部の3学部構成でした。その後、6学部構成の大学へと発展しましたので、大学創生期に匹敵する大きな変化を体験したことになるのではないかと思います。この間、二つの大きな出来事がありました。

その一つは1991年の大学設置基準の大綱化です。一般教育と専門教育の制度的な区分がなくなり、大学の流動化が始まりました。当時、4学部になって

いた全学の教養教育を、実質上、教育学部の教員が担っていました。しかし、それぞれの学部において教養教育を担いたいという要求が強くなり、全学の改組による一般教育担当教官定員の再配置が行われました。工学部の設置もこの過程で実現しました。全学の会議では、教育学部で活躍されていた方々がそれぞれの学部を代表して出席しているという場面に出会うこともありました。もう一つは国立大学の独立行政法人化です。大学の自由度が増えるということでしたが、事務的作業が増え、研究費が以前の1/3以下になるというのが現実でした。大学の盛衰を見る思いがします。

大学拡張期が過ぎて、きびしい外的条件の中で、大学をいかに存続・発展させるかということがこれからの課題となりますが、香川大学の構成員の叡智で乗り越えて行かれることを期待します。最後に、在職中お世話になった関係者の方々に感謝申し上げます。

私のための四国—香川大学退職にあたって



教育学部教授
金子 之史

香川大学に奉職し35年間を終えこの3月で退職します。「私のための四国」の最大関心事は、四国がハタネズミのいない島であったことです。

私は大学院で動物学を専攻しており、研究対象がハタネズミでした。この野ネズミは当時本州、九州、および佐渡島に生息し、四国には分布しないといわれていました。日本列島のこの3島は最後の氷河期まで繋がり、他の野ネズミ4種が分布するので、ハタネズミのみが四国に分布しないのは不可解です。私の大学院生当時はハタネズミが四国に生息しない事実もまだ不確かでした。また、もしもハタネズミが生息しなければ、代わりにどの野ネズミが生息するかも知りたいです。そこで、1971年に北四国農耕地で調査をしましたが、ハタネズミは採集できず代わりにアカネズミが優勢に捕獲されました。ハタネズミのいない島でどのように研究を展開するか不安をかかえながら、1972年4月に香川大学に赴任しました。

しかし、「ハタネズミが四国にいない」

という事実は新たな研究課題に繋がりました。香川県の平野部に浮かぶ小さな山の姿は、関東平野に長く住み関東山地を見ていた者にとっては不思議な地形でした。この地形と関係して野ネズミの分布を四国で調べて行くと、「地形的分布」という概念を考えました。この研究過程は拙書『ネズミの分類学—生物地理学の視点』（2006年12月刊、東京大学出版会、附属図書館に寄贈）に述べてあるので、詳細はご笑覧頂くことにしたいです。

私のため香川大学に奉職した35年間の研究生活は「ハタネズミのいない島四国」のおかげといえます。また、その生活を支えてくれた温暖な気候と人情の深さに依るところも大きいです。香川の人と風土、および香川大学の皆様方のご厚情に深く感謝すると共に、今後ますます香川大学が発展することを願って、退職のお礼の言葉に代えさせていただきます。

退職挨拶

香川大学での20年



教育学部教授
寄田 啓夫

昭和46年に大学・大学院を卒えて36年の年月が経過し、定年退職の時を迎えることになりました。国立・私立・国立と奉職した大学は3校、香川大学には昭和62年4月に着任し、教育学部でちょうど20年、諸先生方には温かく接していただき何かとお世話になりました。

過ぎ去った年月を振り返ってみますと、諺どおり、「光陰矢のごとし」、大学院教育学研究科の創設、教育学部改組など、色々なことがありましたが、あっという間に通り過ぎた感があります。

私の研究分野は、日本教育史で近代日本産業教育史に功績を残したG.ワグネルの研究をはじめ、香川県教育史等の地方教育史に取り組んでまいりました。競争原理や成果主義を導入した業績評価が喧しく言われる昨今、積み残した課題も多くマイペースでのんびりやらせていただきました。

学部・大学院での授業では、20年間に科目名の変遷もありますが、主に西洋・日本の教育思想・制度についての

歴史(教育史)ならびに道德教育等に関する教職・教育学関係の授業を担当させていただきました。また、一般教養教育が全学共通教育科目として全学出動体制となってからは、共通科目の「教育学」と主題科目の「歴史と人間」のどちらかを通算して7年くらい受け持ちました。学生諸君への授業はレジュメのプリントを用意した伝統的な講義方式であり、淡々とした口調で退屈させたかもしれません。

管理運営的な面では、教育学部附属高松小学校長・附属幼稚園高松園舎主事3年間、生涯学習教育研究センター長2年間の併任を仰せつかり、これらの貴重な体験は何ものにも替えがたく、まわりの方々のご支援を得て大過なく役目を果たせたこと、厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、公私ともお世話になりました皆様方には、心から感謝の意を表しますとともに益々のご健勝とご活躍を、そして、国立大学法人香川大学の更なる発展を祈念いたします。

「定年」という名の救い



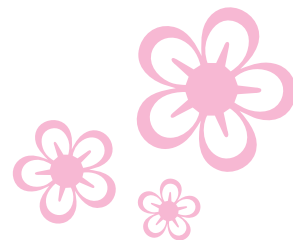
経済学部教授
渡邊 英夫

イギリス委任統治期のイェルサレム生まれのアラブ・パレスティナ人で、後に米国市民となったエドワード・サイード(1935～2003)。西洋の東洋に対する文化的支配を、西洋側からその意識を分析した名著『オリエンタリズム』の著者である。カイロで教育を受けたあと、アメリカの大学で学位を取得し、1970年以降コロンビア大学の英文学・比較文学教授を勤めた。

彼によると異文化の探求は、いつしか自他の文化に対してある種の違和感を感じさせるようになり、そして遂に自らを「異文化的存在」と思うようになると述べ、こうして「真のヴィジョンに必要な精神的超然性と寛容性とを得た者」が造られるのだと言う。私もいつかこうした全世界を異境と思う異文化的存在になれないものかと考えてきた。

思考と感情の記号体系である言語は、紛れもなく文化そのものであるが、文化の過剰が創造を妨げる。保護された知識が新たな知識の受容や理解の障害

であるところの干渉となって、既得言語が新たな理解コードである外国語の導入の妨げになる。さらに、もとの文化との衝突という文化摩擦や、相互理解を妨げる齟齬の原因ともなる。いかにしてこうした障害を越えて、自由な思弁を許す科学を深化させるか。外国語教育の原点もここにある。フランスを知らずしてフランス語は学べない。フランス語なくして真のフランス理解もあり得ない。私の抱いた30余年の志は果たして遂げられたであろうか。



退職挨拶

香川大学における26年間



医学部教授
波多江 種宣

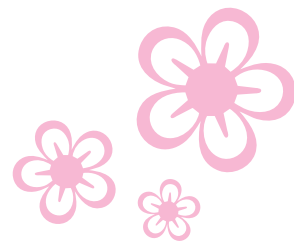
私は、昭和56年、旧香川医科大学設立とほぼ同時に解剖学教授として赴任しました。当時39歳でした。いま附属病院のある場所は、当時はまったくの更地で、野良犬がかけまわっていたことをおぼえています。

解剖学の授業のなかに解剖実習があります。解剖するのは篤志の方のご遺体(献体)です。赴任して最初の年はご遺体があつまず、たいへんな苦勞をしました(現在は、献体組織である白菊会のおかげで満足のいく実習をさせてもらっています)。また、組織学実習用の顕微鏡標本を約15000枚つくりました。これはしっかりつくっていますので、もう30年ぐらいは使用に耐えると思います。

研究は電子顕微鏡で細胞の微細構造を研究しました。研究者にとってのぞましいのは、整備された研究機器と快適な研究環境があたえられることです。そのことについては、40代のいちばん気力・体力が充実しているときに、この大学で研究をさせてもらったことに感謝していま

す。赴任して3年目に細胞内にある構造を発見して、国際電子顕微鏡学会で優秀発表賞にえられたことがあります。その構造が、最近、学生むけの教科書に記載されるようになりました。これも、この大学に感謝している理由のひとつです。

ここ数年、医療をとりまく環境に大きな構造変化がおきています。大学における医学部の役割は質のよい医師を養成することですが、それとともに、地域医療の基幹的役割をはたす使命を担わされています。これは、今後ますます大きくなると思います。



お世話になりました



工学部教授
山崎 敏範

幸町キャンパス近くで生まれ育った私は、鬱蒼と木が茂りプール、草原もある「ケイセン」(旧経済専門学校。近くの人たちの愛称)は絶好の遊び場、自由に出入りしていた。仲間がプールに落ち込み、冷や汗を流したことを昨日のように思

い出す。急増する生徒数に追いつかない校舎不足から、私の中学生生活は、「学芸学部」一画の分校、木造バラック校舎から始まった。ご縁を得て香川大学に奉職したのは1970年、大阪千里丘陵で万国博覧会が開催されていた。「学芸学部」は「教育学部」になっていた。

当時は、大学紛争の余波も残り元気あふれる学生も多かった。2年ほど前には、本部棟を学生に占拠されたと聞いた。あるときなど、議論は巡り、深夜どころか、とうとう明け方までの教授会も経験した。前任校・工学部とは異なる専門領域や文化をもつ教育学部では戸惑うこともあった。若い私を研究指導する先生も大学院もない。切磋琢磨し競争することもないのんびりした職場であった。学生の卒業研究に基づき、自らを奮い立たせながら細々と学会発表を続けるように努めた。内容はさておき、学会発表や論文投稿での査読者とのやり取りは、知的ゲーム感覚で楽しめた。

1985年ごろ、パソコンの普及による情

報教育の必要性が高まるなか、教育学部では、情報科学コースを設置し、私も担当した。必要最小限の人員と施設での情報科学コースは、意欲ある20名の学生を迎える。瀬戸大橋が開通した年だった。学生とのゆったりした交流時間を持てた思い出深い時期だ。工学部に移籍した1998年ごろからは、大学の状況も激変しはじめた。法人化後のいま、中期目標計画の立案・実施から大学・教員評価の具体的実施方法をめぐり、私たちは試行錯誤を重ねている。煩雑で膨大な仕事を前にして、先行き不透明な大学に一抹の不安もよぎる。こんな今こそ、大学は、着実な研究活動と実り豊かな教育実践を機軸にすえることの重要性を痛感する。

30年以上にわたり暖かく見守り教育・研究の空間を提供いただいた香川大学であった。お世話になりました皆様方に感謝し厚くお礼申し上げます。

退職挨拶

退職の挨拶



工学部教授
筑瀬 靖子

1979年1月に香川大学に就任して以来の28年間は、長いようでしかし光陰矢の如く過ぎたような感もいたします。同じ日本統計学会所属の木村等先生のお薦めで経済学部、次に1979年の工学部創設に伴い林町キャンパスに移り、特に数学・統計学の研究・教育に携わってまいりました。その間、大学自治関連の役員の皆様とご一緒させていただきました。また、テニスも周りの教職員の方々から教えていただきまして、一時は随分のめり込み、楽しい思い出が残りました。馬術部の設立に伴い、顧問教員にと頼まれ、部員の学生の皆様と、朝早く馬を見に行ったこと、馬術大会を見学したこと、馬場で馬の身体を洗ったこと等、楽しく思い出され、遂に私も馬に乗れる(?)ようになりました(残念ながら、ギャロップまでには到達できませんでしたが)。

私の専門は、統計数学(数理統計学)、特に、多数量から成る標本空間上の解析を扱う多変量統計学です。アメリカ合衆国東部にあるYale大学で多変量

統計解析の基礎力をつけ、1974年にPh.D.取得後帰国しました。その後も何度か外国の大学、研究機関に喚ばれ、著名な先生方から多くを学び、研究の進展、共同研究、さらには国際親睦の機会に恵まれました。特にこの20年間は、多様体(歪んだ空間)上の多変量統計解析を専門に論文を書き進め、最近、研究成果をSpringer出版社から「Statistic on Special Manifolds」のタイトルで専門書に仕上げ出版することができました。

退職後も、少し分野を広げた多変量解析の研究を、今度はゆったりと広い視野で続けていく所存です。このように専門の研究を積むことができましたことに、私は今、大変幸せな気持ちでおります。これもひとえに皆様方のご配慮をいただきました賜と大変感謝しております。ここに、心より御礼申し上げますと共に、皆様方のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

